

ヘミングウェイ効果 —課題達成に失敗することが動機づけを高める—

○小山義徳（千葉大学）
中谷嘉秀#（RCS Advertising）

マナロ エマニュエル（京都大学）

キーワード：動機づけ，達成動機，失敗活用

問題と目的

課題達成に失敗することは、一般的に動機づけを下げると考えられがちであるが、条件によっては動機づけを高める場合がある。

文豪ヘミングウェイは、ある雑誌において「文章を書く秘訣」を尋ねられ、「一番の方法は、『まだもう少し書けそう』という時に書くのをやめることだ。これを毎日続ければ、書けなくなることはない」（Hemingway, 1935）と述べている。

そこで、本研究では、「課題達成までの残りが少なくなればなるほど、その課題を達成したいという動機づけが高くなる」という現象を、「ヘミングウェイ効果」（Oyama ら, 2018）と名付け、検証を行った。

研究 1

実験参加者 大学生 260 名。新聞のコラムを原稿用紙に書き写す課題を時間内に行う様に指示し、書き写し終わった者から挙手をするように指示した。参加者の内、一部の者が挙手した時点で全員に課題を終了するように指示し、課題未完了の参加者がいるように意図した。その後、書き終わるまでの残りの文字数を記録してもらい、課題の残りをどれくらいやりたいかを、5 件法で回答してもらった。

結 果

課題の残りの文字数と、課題への動機づけの関係を検討した。その結果、残りの文字数が少くなるほど、課題に対する動機づけが高くなることが明らかになった。

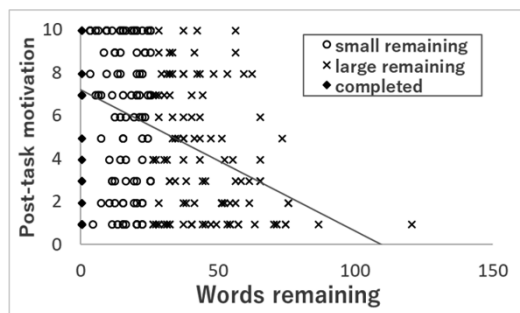


Figure 1 課題の残りと言機づけの関係

研究 2

課題の構造化の程度と「ヘミングウェイ効果」の生起について検討を行った。『構造化されておらず、達成すべきことが不明確な課題』よりも、構造化されており、『達成すべきことが明確になっている課題』の方が、「ヘミングウェイ効果」が生起しやすい」と仮説を立て、検証した。

実験参加者 大学生 260 名。

構造化なし群 幼稚園から高校までの思い出を書いて下さいと指示。

構造化あり群 第一段落に、幼稚園から小学校までの思い出を、第二段落に、中学校から高校までの思い出を書いて下さいと指示。

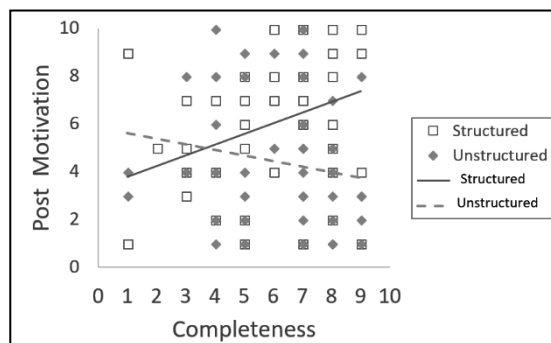


Figure 2 課題の残りと言機づけの関係

結 果

「課題達成までの残りが少なくなればなるほど、その課題を達成したいという動機づけが高くなる」という「ヘミングウェイ効果」は、課題が構造化されており、「何をすればよいか」明確になっている課題ほど顕著に現れることが明らかになった。

引用文献

Oyama, Y., Manalo, E., & Nakatani, Y. (2018). The Hemingway effect: How failing to finish a task can have a positive effect on motivation. *Thinking Skills and Creativity*, 30, 7-18.